

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

提出：2012年12月28日

1. 派遣生の基本情報

氏名：桑原 俊介（くわはら しゅんすけ）

所属：日本学術振興会特別研究員（PD）

旧所属先：人文社会系研究科基礎文化研究専攻美学芸術学研究室

派遣形態：平成24年度 夏学期 個人派遣（PD）

2. 研究課題名

シュライアマハー解釈学における談話モデルの形成

——聖書解釈学の *usus loquendi* と *sensus primorum lectorum* 概念に即して

3. 派遣先での活動

（1）派遣先の基本情報

国名：ドイツ連邦共和国

都市名：ベルリン

研究機関：フンボルト大学ベルリン

受入教授：Lutz Danneberg および Carlos Spöhrhase

（2）派遣期間

出発日：2012年7月22日

帰国日：2012年12月15日

総日数：147日

主な研究成果

（1）当初の計画の概要

派遣生は、シュライアマハー解釈学の形成史を、種々の方法概念の歴史的系譜に即して跡づけることを目的とした研究を続けてきた。当プログラムにおける研究の目的は、とりわけ18世紀中葉以降の聖書解釈学の基礎的方法概念である「言語使用 (*usus loquendi*)」および「当時の読者の意味 (*sensus primorum lectorum*)」の歴史的変遷を研究することを通じて、これらの概念がシュライアマハー解釈学における「対話」をモデルとした解釈理論の形成にどのように受容されたのかを歴史的に跡づけることにある。

（2）実際に達成された成果

（i）当初の計画に即した研究成果

両概念の使用例を18世紀の聖書解釈学を中心に可能な限り渉猟した結果、第一に、エルネスティの「歴史的意味」を転回点として「言語使用」概念が解釈学の中心概念と化し、言語の歴史的な使用に基づく言語的・文法的解釈が18世紀後半のドイツにおける聖書解釈学の主要傾向を形成するようになったこと、第二に、「当時の読者の意味」の契機は、とりわけ聖書の書簡の解釈に関して、古代より解釈学の一契機と

して用いられてきたが、シュライアマハーがそれを、著者と読者との関係性から著者と解釈者の対話関係に適用することで一般化したことが主に明らかとなった。

(ii) 各教授の指導を通じて新たに加えられた論点と研究成果

受け入れを依頼していた Lutz Danneberg 教授が、冬学期に急遽ハンブルク大学に滞在されることになったため、同教授とは、電子メールによる指導に留まった。だが同教授の紹介により、フンボルト大学においては Carlos Spoerhase 教授に指導を仰いだ。同氏は、分析哲学を中心とした現代的な解釈理論を主に研究しており、解釈学の歴史的な研究に集中していた派遣者にとって、解釈の諸問題を理論的な観点から考察する新しい視点をご提供いただいた。同教授には、主として、(1) シュライアマハー解釈学における対話モデルの形成に際して『弁証法 (対話術)』が果たした役割、(2) 「当初の読者の意味」概念を考察するにあたり、読者・著者・解釈者という三者の関係性を構造的に捉えることの重要性をご指摘いただいた。それを受けて派遣生の研究は、当初の計画に加えて、(1) 17世紀中葉から18世紀末にいたる解釈学と論理学の関係性の歴史的展開、とりわけそれを論理学の「蓋然性」概念に即して跡づけること、(2) 「当初の読者の意味」概念を、歴史的展開に加えて、それらに共通する論理的な構造に基づいて研究することが付加された。前者に関しては、論理学の一部としての解釈学の構想とその歴史的展開を、ダンハウアー、トマージウス、マイアー等を中心に検証し、それにより、シュライアマハー解釈学の「漸近」「近接」「技法」といった概念を、論理的解釈学からの系譜において捉えることが可能であることが明らかとなった。後者に関しては、今回の研究期間では十分な研究が果たせなかった。

また、Spoerhase 教授の紹介により、国際ヘーゲル学会会長であり、シュライアマハー全集の編纂者も兼ねる Andreas Arndt フンボルト大学教授にもご指導を頂いた。同教授には、とりわけ(1) シュライアマハー解釈学と彼の神学(教義学)との関係性、(2) 聖書の語りの構造の歴史的変遷を捉え返すことの必要性を教授された。それを受けて派遣生はこの問題を「信仰の類比」「靈感」「適用」という三概念を中心に検討した結果、(1) シュライアマハーは、聖書の解釈とそれに基づく教義体系の形成を明確に区別した点、(2) その際、靈感と啓示との峻別が決定的な役割を果たしていること等が主に明らかとなった。

(3) 今後の展望

今回の派遣において摘み残された「当初の読者の意味」概念の歴史的展開を、読者・著者・解釈者という三項関係に即して検討することが第一の課題である。その上で、前掲の成果を、博士論文の一部として仕上げる予定である。それにあたり、シュライアマハーの解釈理論のみならず、彼の具体的な解釈の実践に関してもより研究を深める必要がある。解釈理論の構築には、解釈の具体的な実践からのフィードバックが高い可能性で予想されるからであり、またそれは、シュライアマハー解釈学の形成史的な展開を知る上でも極めて重要な観点を形成するからである。